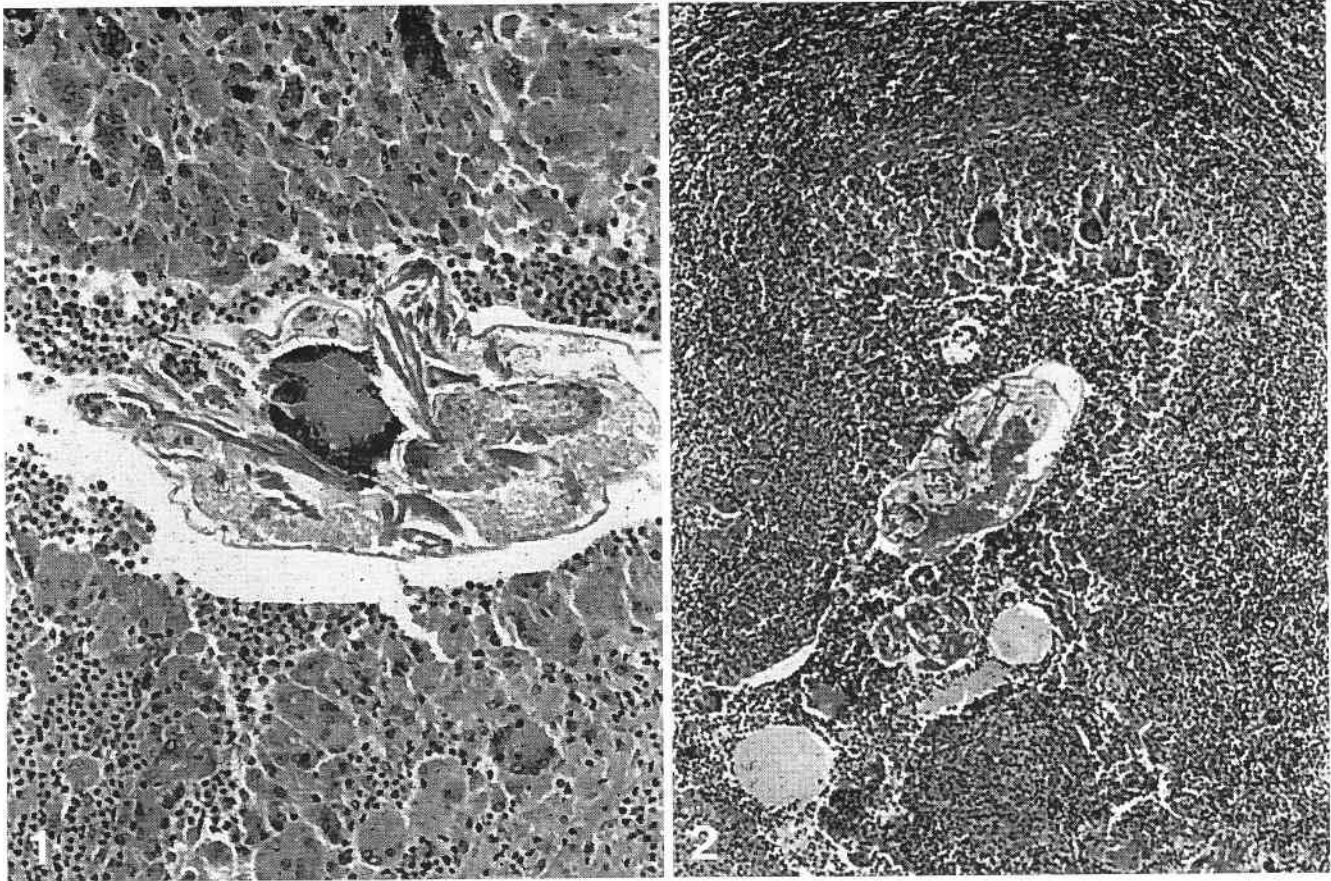


猿の肺

日本大学生物資源科学部獣医病理学研究室出題 第40回獣医病理学研修会標本 No. 762



動物：日本猿，雌，20歳，体重8.7kg。

臨床的事項：愛知県内の研究所で飼育されていたが1998年10月23日に実験殺を行ったところ，肺葉全体に白色結節が多数散在していた。臨床症状は特に認められなかった。

肉眼的所見：肺は結核結節に似た2～4mm大の腫瘤が多数形成され，剖面は癒合した多数の白色結節が大部分を占めており，一部はスポンジ状を呈していた。

組織学的所見：虫体を中心に著しく多数の好酸球をはじめ，組織球，形質細胞，類上皮細胞，異物巨細胞が浸潤し（写真1，HE染色），増殖した膠原線維と線維芽細胞が取り囲んだ肉芽腫病変（写真2，HE染色）が認められた。トルイジンブルー染色では，これらの肉芽腫病巣内に多数の肥満細胞が観察された。また，アルシアンブルー・PAS染色においてPAS陽性を呈するラッセル小体も出現した。いくつかの肉芽腫内には，ベルリンブルー陰性，シュモール反応陽性の黄褐色顆粒色素の沈着及びそれらを

貪食した多数の組織球の浸潤がみられた。その他，肺胞内水腫，好酸球浸潤を伴う末梢肺動脈中膜の肥厚，および肺胸膜の線維性肥厚が認められた。

診断および考察：以上の組織学的所見からマカク属によくみられる *Pneumonyssus simicola* の寄生によって起こる肺ダニ症と考えられ，本症例では，特に好酸球の浸潤が著しいことから「好酸球浸潤の著しい寄生虫性肉芽腫」と診断された。今回の症例は，臨床症状はみられなかったが，組織学的所見から状態は重度であったと考えられる。また，多数の肥満細胞が認められたことから，非常に強いアレルギー反応が起こっていたことが示唆された。肉芽腫内に見られた黄褐色顆粒色素はダニの排泄物と考えられている。